第 5 章

コロナ禍休校における学習を支える

― 学校と保護者の役割に着目して ―

佐藤　香*

第 5 章まとめ

●学校の指導タイプを分類したところ、全体では、「通常型のみ」17.4%、「通常・家庭型」35.6%、「通常・オンライン型」11.8%、「通常・家庭・オンライン型」34.3%、「その他」0.9%となっていました。この構成比は、学校段階や設置者により、大きく異なっています。けれども、**宿題完了度や学習理解度には指導タイプによる違いはなく、またオンラインを導入した指導タイプで必ずしも学習満足度が高いわけではない**ことがわかりました。

●保護者の対応は、**子どもが「勉強の遅れを取り戻せるか」を不安に感じているほど、「生活上の指導」「学習上の指導」ともに多くなる**傾向にありました。「生活上の指導」は中高生の 80 ～ 90%、「学習上の指導」は中学生の 70%、高校生の 50%強が受けていました。保護者による指導は学校再開後の状態に効果があり、「生活上の指導」は生活リズムに、「学習上の指導」は学校での勉強の楽しさに関係していました。

●学校の指導タイプと保護者の対応の関係から、高校生の「学習上の指導」を除いて、学校が家庭での生活や勉強についての指導をおこなっていると、保護者の指導が多くなる傾向が認められました。このことから、学校の指導と保護者の指導は補完財的な関係にあり、**学校の指導と保護者の指導のどちらもが不可欠であり、保護者の指導が十分ではない子どもに対しては外部からの支援も必要だと考えられます**。

＊東京大学

1．はじめに

本章では、とくに 2020 年春の一斉休校期間に着目して、コロナ禍において学校や保護者がどのように子どもたちの学習を支えたのかを見ていくことにしたいと思います。**休校期間中の学校の対応**については、すでに「子どもの生活と学びに関する親子調査 2020」のダイジェスト版（東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所，2021）で報告されています。**【図５－１】**には小４～６生が含まれていますが、ここでは小学生も含めて見ておくことにしましょう。

「宿題が出された」は最も少ない高校生でも 96.4％となっており、ほとんどの学校で実施していたことがわかります。それに次いで「登校日があった」が 70％～ 80％、「予定表づくりなど」「学習計画づくりなど」がそれぞれ約 60％、オンラインでの指導や授業は学校段階によって実施率が大きく異なっています。

保護者の対応については、「中高生コロナ調査」で休校期間中に以下の７項目について保護者や先生と話をしたり指導を受けたりしたかをたずねています。具体的な質問内容は、以下の通りです。

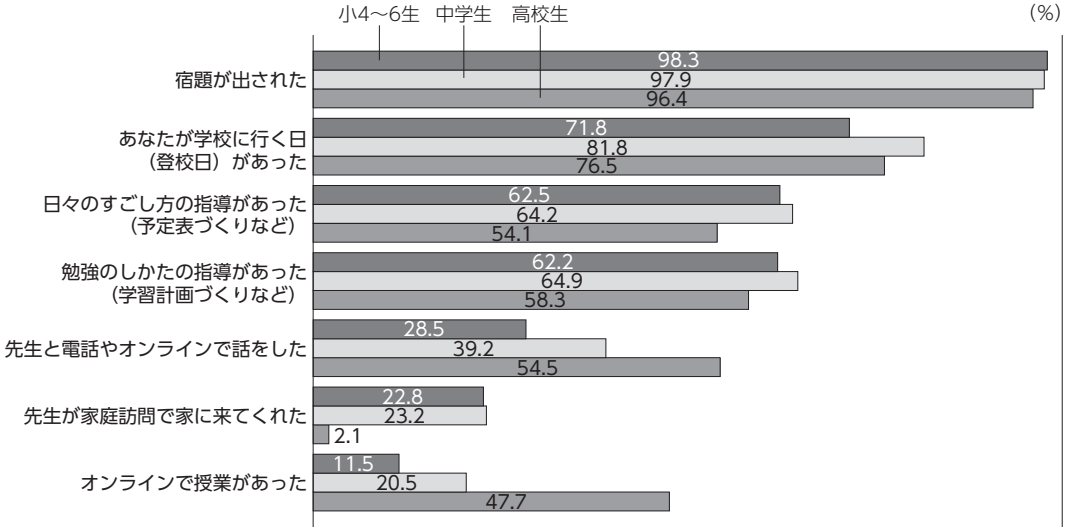
1．身体の健康を保つ方法について（検温、手洗い、マスク着用など）
2．心の安定を保つ方法について（休校や自粛によるストレスの解消など）
3．生活リズムを保つ方法について（1 日の計画づくりなど）
4．学習時間の設定について（目安となる学習時間や時間割など）
5．家庭学習のやり方について（おすすめの勉強方法など）
6．家庭学習の内容について（おすすめの学習教材など）
7．受験や進路選択について（受験に関する情報や進路相談など）

2．学校の指導

2.1.　指導の組合せタイプ

冒頭（図５－１）で見たように、休校中の

図５－１　休校中の学校の対応（学校段階別）



※「よくあった」と「ときどきあった」の合計比率（%）。
※「子どもの生活と学びに関する親子調査 2020」の結果。

学校の対応は７項目の質問が用意されていましたが、ここでは実施率の低かった「家庭訪問」は省略しましょう。「家庭訪問」以外の６項目は、次のように３つに分類することができます。

「宿題が出された」「登校日があった」の２つは、コロナ禍以前の学校生活の延長線上にあると考えられ、「通常型学習指導」（以下、通常型）と名付けることにします。同様に、「日々のすごし方の指導があった」「勉強のしかたの指導があった」の２つは「家庭学習指導」（以下、家庭型）と名付けます。さらに「先生と電話やオンラインで話をした」「オンラインで授業があった」の２つは「オンライン指導」（以下、オンライン型）とすることにしました。

休校期間中の学校は、通常型・家庭型・オンライン型の３つを組み合わせていたと考えられます。その組合せがどのようになっていたかを見てみましょう。全体では、**「通常型のみ」17.4%、「通常・家庭型」35.6%、「通常・オンライン型」11.8%、「通常・家庭・オンライン型」が 34.3%、「その他」0.9%**となっていました[1)]。

【図５－２】に学校段階別の指導の組合せタイプ（以下、指導タイプ）を示しました[2)]。小４～６生では「通常・家庭型」が 46.2%と最も多く、次いで「通常・家庭・オンライン型」が 25.6%となっています。中学生では「通常・家庭型」36.9%、「通常・家庭・オンライン型」が 35.2%で、この２つの組合せが多かったことがわかります。高校生では「通常・家庭・オンライン型」が 46.8%でほぼ半数を占め、次いで「通常・オンライン型」が 20.9%ですので、70%程度でオンライン指導が実施されていたことになります。

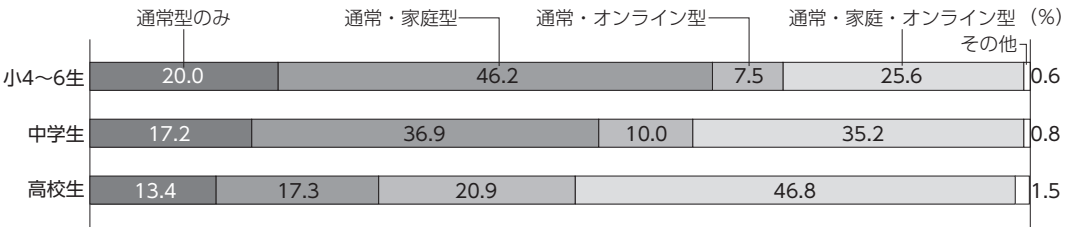
指導タイプは設置者によって異なっているのでしょうか。**【図５－３】**は、中高生について設置者別に指導タイプを示したものです[3)]。中高とも、**公立では「通常・家庭型」と「通常型のみ」が多く、私立では「通常・家庭・オンライン型」が最も多くなっています**。また、設置者による指導タイプの違いは、高校生よりも中学生で顕著であることがわかります。

2.2.　指導タイプと学習効果・満足度

以上のような設置者による指導タイプの違いは、休校期間中から多くの保護者の関心を集めていました。その理由は、指導タイプの違いによって学習の進度が異なり、その結果として学力格差を拡大させることが危惧されたためです。この危惧は現実のものだったのでしょうか。

この点について、「中高生コロナ調査」でたずねた「出された宿題を終わらせることができたか」「休校中に学習した内容をどれくらい理解できたか」「休校期間中の学校の学習指導は満足できるものだったか」の３点と

図５－２　指導タイプ（学校段階別）



※「子どもの生活と学びに関する親子調査 2020」の結果。

の関連性から見ていくことにしましょう。

まず「出された宿題を終わらせることができたか」（宿題完了度）について見ると、中学生でも高校生でも、指導タイプによる違いは統計的に有意ではありませんでした。つまり、**オンライン指導を取り入れたからといって、より効率的に宿題を終わらせることができるような効果はなかった**ことになります。

中学生で「（宿題を）すべてできた」の比率は、「通常型のみ」83.0%、「通常・家庭型」85.7%、「通常・オンライン型」80.5%、「通常・家庭・オンライン型」84.7%です。高校生の「すべてできた」の比率を見ると、「通常型のみ」79.3%、「通常・家庭型」77.1%、「通常・オンライン型」74.9%、「通常・家庭・オンライン型」76.2%でした。中学生でも高校生でも統計的に意味のある違いではありません。

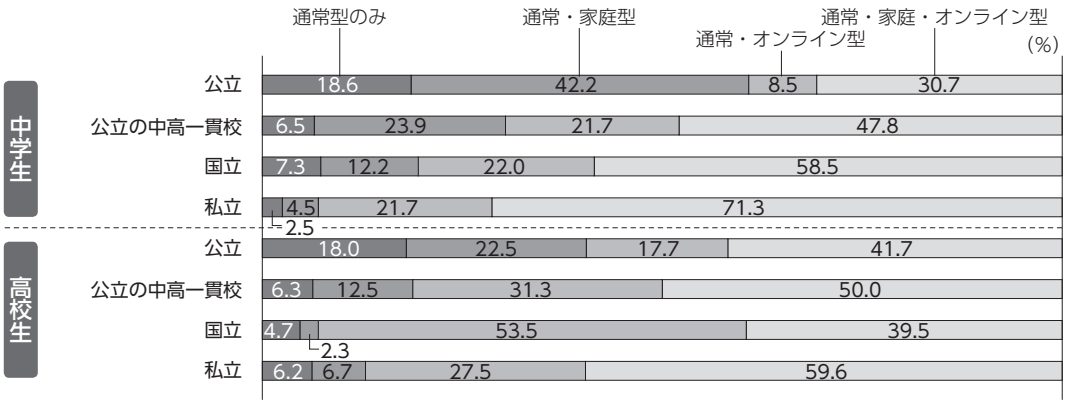
とはいえ、全員が同じように終わらせることができたわけではありません。「子どもの生活と学びに関する親子調査2020」の「ダイジェスト版」（東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所，2021；図1－5を参照）に示されているように、成績階層によって宿題の完了度は明らかに異なっています。けれども、それぞれの学校の生徒全員が、学校の採用した指導タイプによって学習しており、成績による違いはないため、指導タイプによる違いは見られなかったと考えることができます。

次に「休校中に学習した内容をどれくらい理解できたか」（学習理解度）を見ることにしましょう。学習理解度についても、宿題完了度と同様に、指導タイプによる直接的な違いは認められませんでした。

中学生で「（休校中に学習した内容を）十分に理解できた」の比率は、「通常型のみ」19.4%、「通常・家庭型」21.4%、「通常・オンライン型」25.1%、「通常・家庭・オンライン型」23.8%です。高校生の「十分に理解できた」の比率を見ると、「通常型のみ」10.0%、「通常・家庭型」15.1%、「通常・オンライン型」14.5%、「通常・家庭・オンライン型」13.7%でした。「通常型のみ」でやや少ないようですが、統計的に意味のある違いではありません。

以上のように、**宿題完了度・学習理解度の2つについては、中学生でも高校生でも指導の組合せタイプによる違いは認められませんでした**。もちろん、質的にも量的にも、指導タイプに即した学習が課されていたために指導タイプによる違いが見られなかったという

図5－3　指導タイプ（設置者別）



※「子どもの生活と学びに関する親子調査2020」の結果。小学生のデータは載せていない。

可能性は残ります。この点には注意する必要がありますが、たとえば学習進度に大きな差異が生じにくい公立中学校で指導タイプによる違いがないことを見ると、指導タイプそれ自体によって学力格差が拡大する可能性は、それほど大きくないといってよいでしょう。

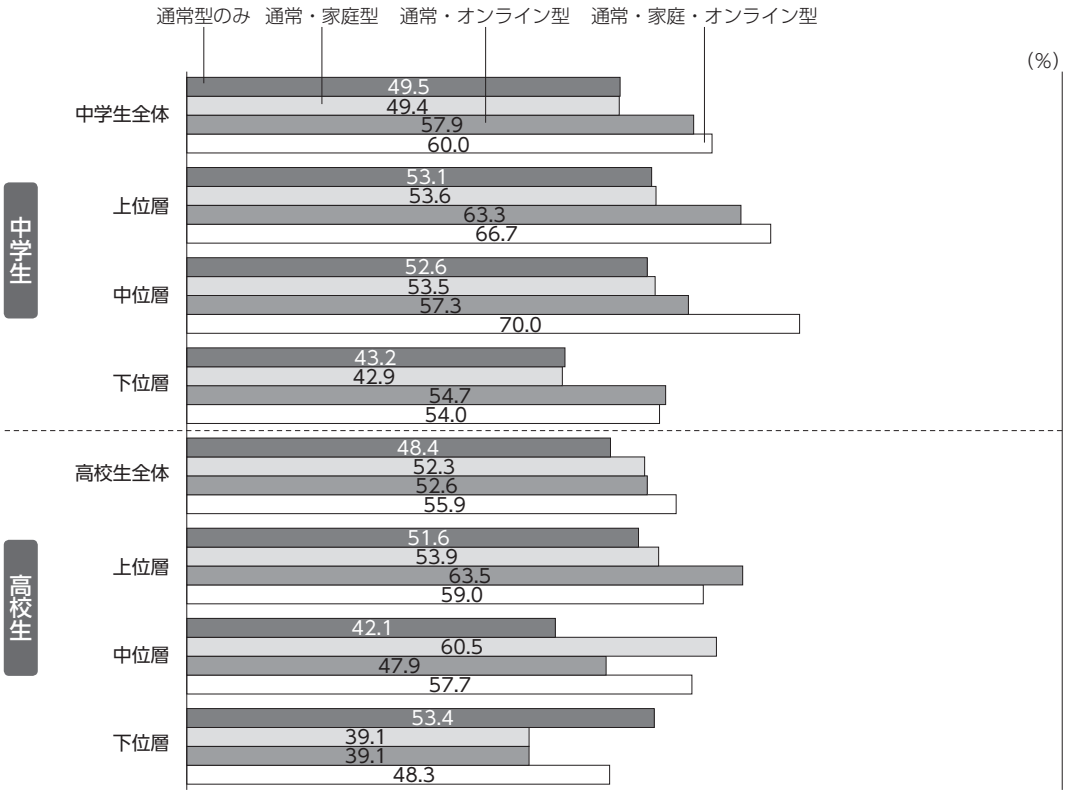
ただし、「休校期間中の学校の学習指導は満足できるものだったか」については、上記とはやや異なる結果となりました。**【図５－４】**に、成績階層と指導の組合せタイプ別に「とても満足できるものだった」「まあ満足できるものだった」の合計比率を示しました[4)]。

中学生ではオンラインを取り入れた指導タイプで満足度が高くなっています。とくに成績の上位層での満足度が高いようです。他方、高校生では必ずしもオンラインを取り入れた指導方法で満足度が高いとはいえません。成績上位層ではオンラインを取り入れた指導タイプで満足度が高い傾向がありますが、中位層では「通常・家庭型」、下位層では「通常型のみ」が最も高い満足度となっています。

宿題完了度や学習理解度では指導タイプによる違いがないにもかかわらず、満足度には違いが生じるのはなぜでしょうか。中学生では、オンライン指導という新しい経験をすることが満足度を高める要因となったのかもしれません。けれども、高校生では新しい経験のみが満足度につながる効果はありません。「通常・家庭・オンライン型」と比較すると、「通常・オンライン型」の満足度が低くなっていることを見ると、家庭指導も重要であることがわかります。

オンライン指導を取り入れればよいというわけではなく、**どのようなオンライン指導を、**

図５－４　学習満足度（成績別×指導タイプ別）



※「とても満足できるものだった」と「まあ満足できるものだった」の合計比率（%）。

どのような組み合わせでおこなうのが最適であるかを考える必要があるでしょう。また、高校での指導は、学習だけでなく、学習に関連したさまざまな不安を解消することにもつながっているのかもしれません。これらの不安を取り除く効果があれば、どのような指導タイプであっても満足度が高くなると考えることができます。

3．休校中の保護者の対応

3.1.　生活上の指導と学習上の指導

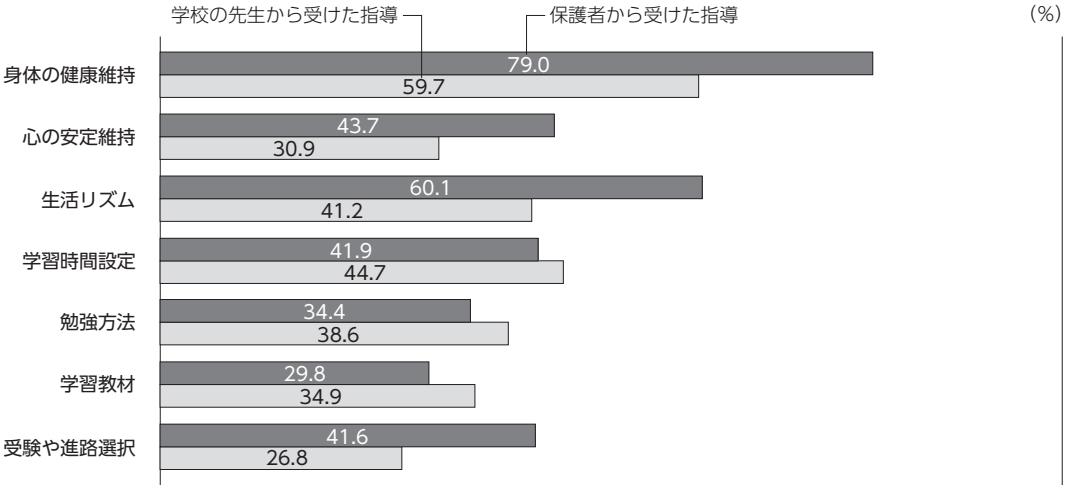
この章の最初に述べたように、休校中の保護者の対応は７項目ありました。それぞれについて「話をしたり指導を受けたりした」比率を**【図５－５】**に示しました。参考のため学校の先生から受けた指導の比率も示してあります。「身体の健康維持」「心の安定維持」「生活リズム」「受験や進路選択」の４項目で、保護者のほうが学校の先生よりも高くなっています。なお、「受験や進路選択」以外の６項目では、中学生のほうが高校生よりも保護者と「話をしたり指導を受けたりした」比率が高くなっています[5)]。

ここでは「身体の健康維持」「心の安定維持」「生活リズム」の３項目を「生活上の指導」、「学習時間設定」「勉強方法」「学習教材」「受験や進路選択」の４項目を「学習上の指導」と呼ぶことにしましょう。

保護者から「生活上の指導」をまったく受けていない中学生は12.9％、１項目は20.3％、２項目は26.4％、３項目は40.3％となっています。高校生については、まったく受けていない19.1％、１項目26.2％、２項目22.8％、３項目31.9％でした。**ほとんどの中高生が何らかの生活上の指導を保護者から受けていた**ことがわかります。

一方、「学習上の指導」についてみると、中学生では０項目30.7％、１項目20.5％、２項目12.6％、３項目16.2％、４項目20.0％でした。高校生では０項目44.6％、１項目27.0％、２項目11.2％、３項目5.5％、４項目11.7％となっています。**「生活上の指導」と比較すると、保護者からの「学習上の指導」は少なく、とくに高校生では、コロナ禍による休校中であっても、半数近くが何も指導を受けていなかった**ことになります。

図５－５　保護者と先生から受けた指導



※複数選択で選択された比率（%）。

3.2.　子どもの不安に対応した保護者の指導

休校中の子どもたちは、さまざまな不安を抱いていました。調査でも不安について多岐にわたる質問をしています。ここでは、そのうち**「勉強の遅れを取り戻せるか」が不安**であったという項目に着目します。この不安が「かなりある」「まあある」と回答した比率は、中学生では 58.7%、高校生では 61.7%にのぼります。

【図５－６】には「勉強の遅れを取り戻せるか」の不安の回答（「かなりある」～「まったくない」）別に、保護者による「生活上の指導」と「学習上の指導」の項目数の平均値を示しました。中学生・高校生に共通して、**どちらの指導についても、不安を強く感じていた子どもに対して指導項目数が多い傾向が認められます**[6)]。

保護者は、休校中の子どもを観察し、勉強の遅れを取り戻せるか不安を感じているかどうかを敏感に察して、不安を強く感じている子どもに対してはさまざまな助言を与えていたと考えられます。「生活上の指導」も「学習上の指導」も、勉強の遅れに不安を感じている子どもたちに対するものだったことが、この分析からわかります。

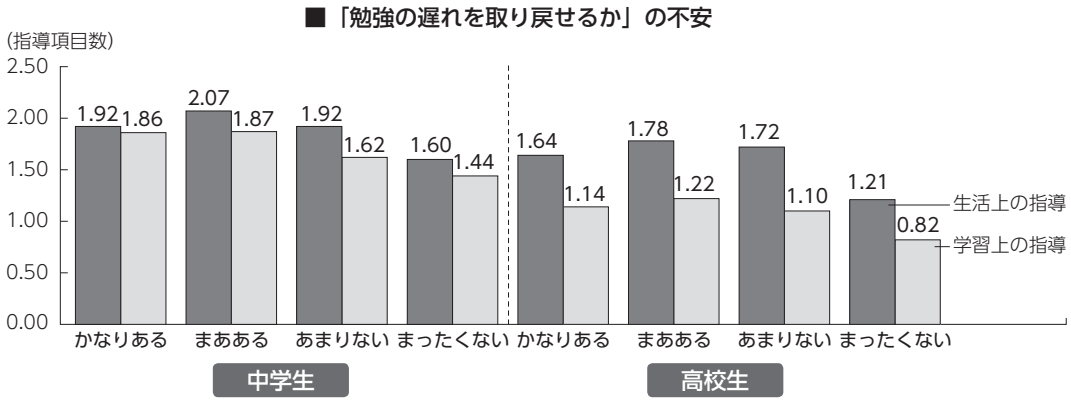
3.3.　保護者による指導の効果

以上のような休校期間中の保護者の指導は、どのような効果をもっていたのでしょうか。ここでは学校再開後の適応に着目することにしましょう。「生活上の指導」との関連では「生活リズムを元に戻すのがたいへんだった」に対する回答、「学習上の指導」との関連では「学校で勉強できるのがうれしかった」に対する回答を用います。どちらの項目も「とてもそう」「まあそう」「あまりそうではない」「まったくそうではない」の４段階で回答してもらっています。

学校再開後に「生活リズムを元に戻すのがたいへんだった」に「とてもそう」「まあそう」と回答している比率は、中学生で 51.3%、高校生で 55.5%となっています。**中学生でも高校生でも半数強が「生活リズムを元に戻すのがたいへんだった」と感じていた**ことになります。

【図５－７】には、保護者による「生活上の指導」の項目数ごとに「生活リズムを元に戻すのがたいへんだった」に「とてもそう」と回答した比率を示しました[7)]。指導項目数が少ないほど「とてもそう」と回答した比率が高く、とくに項目数が０の場合は、中学生

図５－６　「勉強の遅れが不安」と保護者の指導項目数

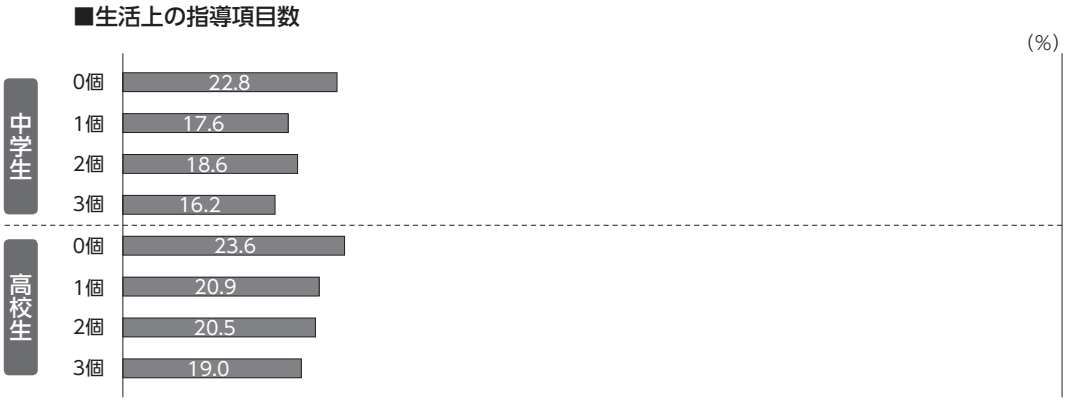


でも高校生でも、生活リズムを回復することが難しかったようです。休校期間中の保護者の指導は大きな役割を果たしていました。

続いて、学校再開後に「学校で勉強できるのがうれしかった」について見ていきましょう。この質問に「とてもそう」「まあそう」と回答した比率は、中学生66.1％、高校生57.7％でした。**高校生では過半数程度、中学生では７割弱が学校で勉強できることを嬉しく思っていた**ことがわかります。

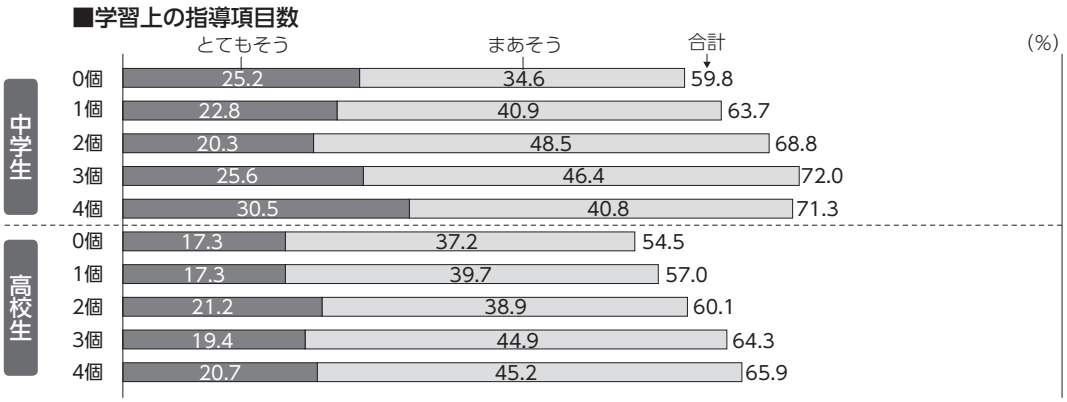
【図５－８】には、保護者の「学習上の指導」項目数別に「学校で勉強できるのがうれしかった」に「とてもそう」「まあそう」と回答した比率を示しました[8)]。指導項目数が少ないほど「とてもそう」「まあそう」の比率が低くなっています。**休校期間中の保護者の学習上の指導は、学校再開後に勉強に向かうことを嬉しく思う気持ちを維持し、あるいは準備する効果があった**ようです。

図５－７　「生活リズムを元に戻すのがたいへんだった」
（保護者による「生活上の指導」項目数別）



※「とてもそう」の比率（%）。

図５－８　「学校で勉強できるのがうれしかった」
（保護者による「学習上の指導」項目数別）



※「とてもそう」と「まあそう」の合計比率（%）。

４．　学校の指導タイプと保護者の対応との関係

ここまで休校中の学校の指導と保護者の対応がどのようなものであったか、それぞれについて見てきましたが、ここでは両者の関係に着目します。両者は代替財的な関係なのでしょうか。それとも補完財的な関係なのでしょうか。

代替財と補完財というのは、２つの財がどのような関係にあるかをあらわす経済学の用語です。ＡとＢは特質が似ているため取り換えることができるときは、ＡはＢの代替財であるといいます。よく取り上げられる例としてはバターとマーガリンがあります。補完財は代替財とは逆に、Ａの消費が増えるとＢの消費も増えます。パンとバター（またはマーガリン）のようなものです。

学校の指導と保護者の指導が代替財的な関係にある場合には、学校の指導が増加すれば保護者の指導が減少し、学校の指導が減少（不足）すれば保護者の指導が増加することになります。逆に両者が補完財的な関係にある場合には、学校の指導が増加すれば保護者の指導も増加します。

休校中の学校の指導タイプ別に保護者の指導項目数の平均値を示したのが**【図５－９】**と**【図５－10】**です。図５－９には「生活上の指導」、図５－10には「学習上の指導」について示しました。順に見ていくことにし

図５－９　保護者による「生活上の指導」項目数（学校の指導タイプ別）

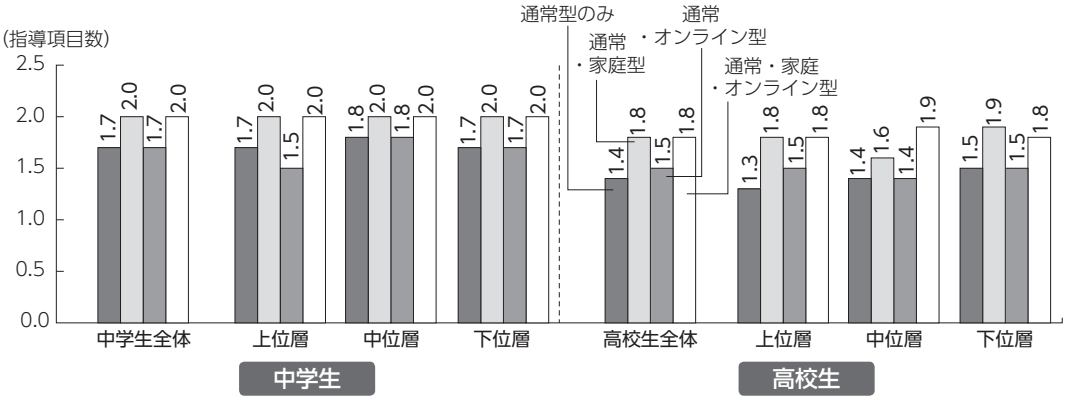
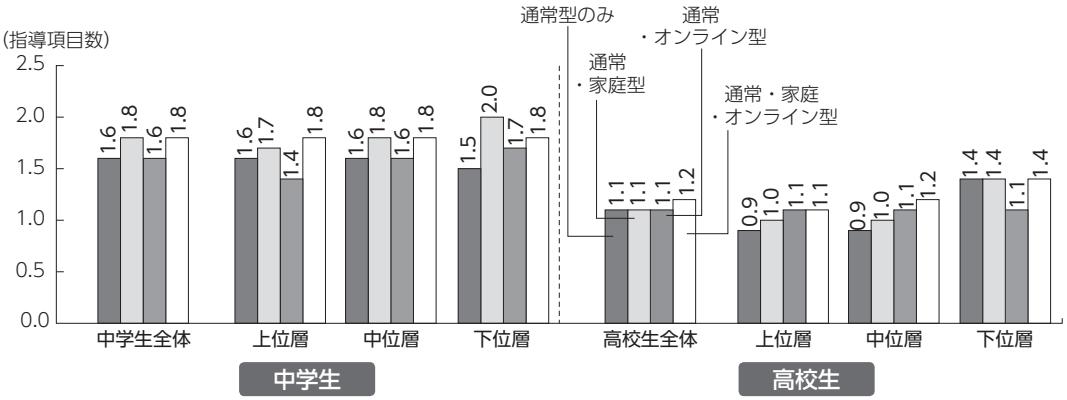


図５－10　保護者による「学習上の指導」項目数（学校の指導タイプ別）



ましょう。

まず図５－９の「生活上の指導」について、中学生全体と高校生全体を見ると、類似した傾向が認められます。**「通常･家庭型」と「通常・家庭・オンライン型」で高く、「通常型のみ」と「通常･オンライン型」では低くなっています**。成績階層別に見ても、この傾向は変わりません。また、高校生の成績上位層で「通常型のみ」が生活上の指導項目数が最も少なくなっていることもわかります。

続いて図５－10で「学習上の指導」を見ると、**中学生全体では生活上の指導と同じく「通常・家庭型」と「通常・家庭・オンライン型」で高くなっていますが、高校生全体では指導タイプによる違いはあまり明確ではありません**。成績階層との関係を見ると、中学生ではどの成績階層でも類似した傾向にありますが、高校生では成績階層によって傾向が異なっています。

高校生の保護者による「学習上の指導」の項目数は、「生活上の指導」や中学生の「学習上の指導」とは異なり、「通常・家庭型」と「通常・家庭・オンライン型」が高いという傾向が見られません。上位層と中位層ではオンラインを採用した指導タイプでやや高くなっています。オンライン授業が保護者からの指導のきっかけになったのでしょうか。下位層では上位層・中位層と比べて指導項目数の平均値が高く、「通常・オンライン型」を除いた３つの指導タイプでほとんど並んでいます。

「生活上の指導」や中学生の「学習上の指導」は、「通常・家庭型」と「通常・家庭・オンライン型」で高くなっていました。この２つのタイプの共通点は、家庭型の学習指導、すなわち「日々のすごし方の指導があった」「勉強のしかたの指導があった」があることです。**休校中の家庭での生活や勉強について学校からの指導があると、保護者による指導も多くなっている**ことがわかります。高校生の「学習上の指導」については、学校からの指導があっても、それが保護者からの指導を促進することは少ないようです。

以上のことから、**学校の指導と保護者の対応は基本的には補完財的な関係にある**と考えることができます。家庭での生活や学習について学校からの働きかけがあれば、保護者もそれに対応した指導をおこなっています。そして、すでに 3.3. で見たように、保護者による指導があったことによって、学校再開後の子どもたちの適応も促されていきました。

５．おわりに

以上、2020 年春の一斉休校期間中に、学校と保護者がどのように子どもたちの学習を支えたのかを見てきました。学校の指導は、宿題や登校日の「通常型」、家庭での生活や勉強についての「家庭型」、そして「オンライン型」に大別され、それらを組み合わせておこなわれていました。また、保護者の対応には「生活上の指導」と「学習上の指導」の２つがありました。

学校の指導の組合せは指導タイプとして分類することができます。「通常型のみ」「通常・家庭型」「通常・オンライン型」「通常・家庭・オンライン型」の４つで 99％を占めており、その構成比は学校段階や設置者によって大きく異なっていました。**学校段階があがるほど、また公立よりも私立でオンライン型の指導が導入されている**傾向が明らかです。

このような指導タイプの学習効果を「宿題完了度」「学習理解度」「学習満足度」の３つの側面から考察しました。宿題完了度と学習理解度については、中学生でも高校生でも指導タイプによる違いは認められませんでした。オンライン指導を導入していなくても、

さまざまな工夫をすることで子どもたちが効率的に学習を進めることは可能だと考えられます。言い換えれば、**オンライン指導の導入それ自体が学習効果を向上させるわけではなく、オンラインでどのような指導をおこなうのかを工夫する必要がある**ということになります。

学習満足度についての検討からも、高校生ではオンライン指導を取り入れた指導タイプの満足度が高いわけではなく、とくに成績中位と下位層ではオンラインを導入していない指導タイプでの満足度が高くなっていました。学習でつまずきがちな生徒に対してオンラインで何をどのように指導するのかについての工夫は、まだ不十分だったといえるでしょう。

中学生の約 90％、高校生の約 80％は、休校中の保護者による「生活上の指導」を受けていました。「学習上の指導」はそれよりも少なく、とくに高校生では半数近くが何も指導を受けていませんでした。子どもが「勉強の遅れを取り戻せるか」不安に感じているほど、保護者は「生活上の指導」や「学習上の指導」をおこなう傾向にありました。

多くの保護者は子どもの状態を把握して、必要な指導をおこなっていました。けれども、保護者によっては、子どもの不安を察していなかったり、察していても話をしたり指導したりすることができなかったりすることもあるでしょう。友人や先生と話すことができず、子どもたちが不安を解消することが難しい休校期間は、家庭での指導が重要になります。こうしたときに**十分に子どものニーズを把握したり、指導したりできない家庭に対する支援を考える必要があります**。

このことは、保護者による指導の効果によっても裏付けられます。中学生・高校生に共通して、**休校中の生活上の指導項目が多いほど、学校再開後の生活リズムを取り戻すことが容易であり、また学習上の指導項目が多いほど、学校で勉強できることが嬉しいと思う**傾向がありました。高校生に対する学習上の指導は難しいと考える保護者も少なくないでしょう。けれども、指導ではなく話をするだけでも効果はあるのではないでしょうか。

休校中の学校の指導と保護者の指導の関係については、学校が家庭での生活や勉強について指導する指導タイプで、保護者の指導も増加する補完財的な関係にあることがわかりました。学校は生徒に対する指導をおこなったわけですが、その指導を受けて保護者も子どもに対する指導の必要性を認識したと考えられます。つまり、**学校の（生徒への）指導が、間接的に保護者に対する指導の要請になっていた**ことになります。

休校期間における家庭での指導の重要性は言うまでもありません。けれども、上記のような保護者の多様性を考えると、学校が保護者に対して直接的に子どもの指導を要請することには議論の余地があるでしょう。本章で見たように、休校期間中、学校と保護者は協力して子どもたちの学びを支えてきました。両者が補完財的な関係にあることをふまえると、パンがなければバターもなくなる現象が生じる可能性もあります。パンがあってもバターがない状態を防ぐとともに、パンである学校の指導が不足しないことが最も重要でしょう。

【注】

1）以下では「その他」についての分析は省略します。
2）学校段階と指導の組合せタイプの関連性はχ２乗検定により 0.1％水準で有意でした。
3）設置者と指導の組合せタイプの関連性はχ２乗検定により 0.1％水準で有意でした。
4）χ２乗検定により、指導の組合せタイプと満足度（４段階）の関連性は、中学生全体では 1％水準、高校生全体では 10％水準で有意でした。
5）学校段階と「話をしたり指導を受けたりした」との関連性は、どの項目でもχ２乗検定により 0.1％水準で有意でした。
6）不安のカテゴリ別の指導項目数の平均値の違いは、t 検定により 0.1％水準で有意でした。
7）生活上の指導項目数と「生活リズムを元に戻すのがたいへんだった」の回答との関連性はχ２乗検定により、中学生では 5％水準、高校生では 10％水準で有意でしたが、図５－６には傾向がわかりやすい「とてもそう」を示してあります。
8）学習上の指導項目数と「学校で勉強できるのがうれしかった」の回答との関連性はχ２乗検定により、中学生でも高校生でも 0.1％水準で有意でしたが、図５－８には傾向がわかりやすい「とてもそう」「まあそう」の合計を示してあります。

【参考文献】

東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所，2021，『子どもの生活と学びに関する親子調査 2020　ダイジェスト版』ベネッセ教育総合研究所．https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=5579